

終りに

今春発刊された「広辞苑」改訂版第七版に約一万語もの新たな語が加えられたという。近年、漢字離れや美しい日本語が廃れているとの危機が喧伝されている。郷土出身の英文学者福原麟太郎が「茶山詩五百首」（昭和50年）発刊を祝して「この（菅茶山の）書物が、世の人々から競って読まれ、この近世詩人の中の巨峰への挑戦者が増えることを心から祈ってやまない」と寄せている。

昭和63年、初代高橋令之会長は本会報創刊号に「茶山先生にまつわる情報の交流」を所期の目的としている。しかし、茶山を全国的に最も著名にした漢詩文という言語媒体が敗戦と時代の奔流に押し流され巨峰茶山への挑戦を敬遠させている現実も否めない。悲惨な大戦期の空白を経て、昭和62年、菅茶山遺芳顕彰会が発足、生誕祭並びに講演会、研修会、茶山資料の発刊、茶山詩碑の建立など多彩な事業を展開、「茶山詩なくして茶山は語れない」オーソドックスな顕彰活動が本格化した。同時に、小学校卒業予定者対象の「史跡めぐり」（神辺ライオンズクラブ）や成人対象の「茶山ポエムハイキング」（菅茶山記念館）、「史跡めぐり」（神辺商工会・神辺観光協会）などのコラボ事業が年輪を刻んでいる。

地元教育現場では、早くから「茶山に学べ」をモットーに、副読本「郷土読本」（昭和6年）、広島県の歴史（昭和54年）などに茶山を採録している。近年、「茶山原詩朗読」や「総合的な学習」内容として定着。一方、次世代を担う「学種」たちにふるさとの未来創生の夢を託した「茶山ポエム絵画展」（平成5年）が創始され、既に四半世紀の歩みを重ねている。高校では、校史や教育活動の一環として、また、大学でも、地域に密着、地域の未来創造の教育内容として注視している。海外でも、中国北京で高評価を得て「黄葉夕陽村舎詩」（中国版）が出版されるなどの朗報が寄せられている。

平成7年、子孫の菅好雄氏の英断で茶山秘蔵の「黄葉夕陽文庫」が広島県立歴史博物館に寄贈され、20年にわたる整理、調査研究を終え、平成26年、その一部が「茶山関係資料」(五三六九点)として国重要文化財に指定され、将に今秋、生誕270年祭の節目に、装い新な常設展示室で、日常的に、順次、一般公開される意義は大きい。

巨峰茶山への登山道は峻険ではあるが多岐に亘ってたゆみなく拓かれている。編集委員としては、本書並びに姉妹編の電子ファイル版(第21号・2011年版以降)とHP「茶山新報」(2017年開設)によって記録・情報提供が永続・補完され、やがては多言語版も添え、ささやかながら次世代の語り部たちの頼みの杖となることを希ってやまない。

結びに当って、今回の記念事業に対して過分の助成を賜った財団法人義倉、公益財団法人ツネイシ財団、公益財団法人エネルギー・スポーツ財団並びに編集に関わってご懇切なご教示を頂いた地元古文書研究家林多恵子氏に対して深甚の謝意を表し結びとしたい。

平成30年(二〇一八年)10月

編集委員長 上 泰 二